

# 飢餓の島 「ウォッセ」 戦跡紀行

戦没者  
遺骨調査  
派遣

五三一海軍航空隊の艦上攻撃機「天山」のプロペラと火星型発動機。現在の滑走路そばの広場に置かれ、子供たちの格好の遊び場になっている。

カメラ&ペン=鈴木千春



# 丸

[MARU]

2019  
5  
月号

# 最後の戦艦

特集★アイオワ級のすべて



ワイドイラスト  
世界の「装輪式自走榴弾砲」  
カタログ

カラー&モノクロ  
飢餓の島「ウォッセ」戦跡紀行  
海底の「比叡」&ホーネット  
「アイオワ」記念アルバム  
黎明期の陸軍航空機②

最新軍事セミナー

## INF全廃条約破棄後の 米口の新核戦略





巨大な貯油（燃料）タンクが3つ並ぶ。直径は4~5m程もある。環礁の土地は深く掘ることができないため、建物や構造物のほとんどが地上にむきだしになっている。当時、ここに屋根や囲いがあったかは不明だ。



島の南部にある第三砲台の海軍12.7cm連装高角砲。敵の上陸に備えて内海を守備していた。大本営も、敵はウォッセに上陸するであろうと予想していた。現在すぐそばには民家があり、コブラを干すなど、島民はゆったりと暮らしている。

## 飢餓の島「ウォッセ」戦跡紀行



ジャングルの中を分け入り、発見した2階建ての八〇二空本部通信所跡。爆撃を受け、中は崩壊している。ウォッセには日本海軍の建物、トーチカ、弾薬庫など、多くの戦跡遺構が、手付かずのまま残っている。



窓から飛び込んだ爆弾が炸裂し、ここで多くの将兵が犠牲になった。中はコンクリート片が散乱したままで、時間が止まっているような静寂さだった。コンクリート片の下に遺骨を探したが今回は発見できなかった。

**太** 平洋の真ん中に浮かぶ美しい環礁の島マーシャル諸島ウォッセ島。ヤシの木が繁茂する、のどかな島は、かつて日本の委任統治領であり3000名を超える日本軍将兵が守っていた。主として海軍第64警備隊が守備にあたったが、島民は現在もそのエリアを「ケービタイ」と呼び、「ミハリ」「ソードイン」「ハイキュー」という言葉も残る。

74年前のウォッセは、壮絶な飢餓の島だった。マキン、タラワ陥落後、米軍上陸の次の矛先はウォッセだったが、防御の薄いクエゼリンに変更。昭和19年2月クエゼリン守備隊が玉砕した。それ以降、米軍の絶対的制空権下、ウォッセは一切の補給を絶たれ、敵中にとり残され、兵士は次々に餓死した。

昨年11月、遺骨調査のため初めてこの地に降り立った。ウォッセの戦没（餓死）者数は、厚労省発表では2900名。その中に私の大叔父もいる。昭和40年代に派遣団が208柱を収容し、今回は45年ぶりの派遣である。島には2700名の遺骨が眠っている。次回の収容派遣で遺骨を日本にお連れする予定だ。島内各所に残る、戦跡遺構の一部をご紹介します。



大砲と航空機の発動機が無造作に放置されている。奥にあるのは二式大艇のプロペラと火星型発動機と思われる。





「このトーチカは最初、全てが土に埋まっていた、小山ようになっていたが、私たちが掘り出したんだ」と島の人が。トーチカが土に埋まるほどの爆撃を受けたのか、占領後に米軍が埋めたのかは不明である。



トーチカ内の弾庫の文字。海岸のトーチカの内部は4区画に分かれ、中央に弾庫、その上には見張り員の立つ狭いスペースがあった。銃眼からは、真っ青な海が見え、静かな波の音だけが聞こえる。



厚みが1m程ある頑丈な弾薬庫。南方ではセメントも何もかもが不足した。マーシャル語で戦争を意味する言葉は「タリナイ」という。住人に中を覗かせてもらおうと、さすがに暑いようで、ずっと扇風機が回っていた。



一〇四航空廠のあったエリアに残る魚雷の調整架台。今でもびくともしない頑丈さだ。島の真ん中にあり、知らない人を見ると、何かのオブジェかと思うほどきれいに残っている。

調査中に地中から出てきた銃弾。米軍のものと思われる。遺骨情報のあった場所を試掘する前に、不発弾の危険があるため金属探知機を使う。音が鳴り響くと一同に緊張が走る。



八〇二航空隊の飛行艇棧橋。コンクリートも当時のまま。飛行艇はここから、広大なマーシャルの環礁間の連絡や、偵察に飛び立って行った。整備兵の元気な声や、エンジン音を響かせて飛び上がっていき勇姿を想像した。

五三一空指揮所跡。現在は人が住んでいる。南洋群島（チューク、パラオなど）に残る海軍の建物は同じ規格の造りが多いようだ。島の人は、「75年も残る頑丈な日本の建築技術を学びたい」と語っていた。



深いジャングルに埋もれていた大砲。周囲から全く見えないほど雑草に覆われていたが、島の人が鋸刀で伐採し、その姿を現わした。高温多湿の島は、すぐに雑草が成長する。



外海に向けて設置されていた第一砲台。うっそうとしたジャングルを拓き、74年ぶりに陽の目をみた。外海に居並ぶ敵艦船に立ち向かい、盛んに砲撃したのである。左の砲身は半分になっている。